

ヘンゼルと Chihiro

香田芳樹

以前ベルリン滞在中に、新聞の劇場案内に Prinzessin Mononoke という文字を見つけて、夜ふらりと出かけてみた。宮崎アニメはそれ以前にも知ってはいたが、ドイツ人と観ることにちょっとしたスリリングな遊び心をくすぐられたからだ。映画館では8時の開演前にすでに長蛇の列ができていた。知的なドイツ人は Manga や Anime は見ないと誰からか聞かされていたので、意外だった。前に並んだ青年二人が、熱っぽく宮崎アニメの魅力について語るのにも驚いた。『ラピュタ』がお気に入りとのこと。上映中も不思議な発見をいろいろとした。特に印象深いのは「笑いのツボ」が外れていること。アシタカの矢に打たれて郎党の首が転がり落ちるシーンに、ドイツ人が拍手喝采するのには奇異な感じがした。

あれから5年。その間に宮崎監督の次作「Chihiros Reise ins Zauberland」はベルリン映画祭金熊賞をとった。あの夜の熱気がこの受賞の前兆だったのかもしれない。

ところで気になるのは、このきわめて日本情緒あふれる作品がドイツ人に本当に理解されたのだろうかということである。いやそもそも当の日本人にも理解できたのであろうか。八百万の神や湯屋や水神信仰が、現代に生きる我々に縁遠いものであるばかりではない。公開当初このアニメを「特定のメッセージをもたない」「現代のモンタージュ技法を駆使した」作品とするもっともらしい映画評を見た。日本人でさえ溢れるイメージの奔流に翻弄されて、作品のメッセージを容易につかみきれないのである。いわんやドイツ人をや、ではないか。それとも彼らは郎党の首よろしく、彼らなりの「外れたツボ」でこの映画を楽しんだのであろうか。電子書店 Amazon.de のレビューにある「Chihiro」への絶賛、「ディズニーを超えた」「アリス」

を思い出させる」等々は、ドイツ人がこのアニメを欧米的な思考の枠組みで理解していることを表している。しかしこれを単なるユーロセントリズムで片づけることはできまい。そうであれば、宮崎アニメは全世界的な人気を獲得しなかったはずである。そこには万人を惹きつける普遍的な何かがあるはずである。

ドイツ人に「Chihiros Reise」が魅力的なのは、純日本風といわれるこのアニメが、実は純ヨーロッパ的で、教養小説にもなりそうな明確な論理で構成されているからだと思う。そのことは例えば「Chihiro」をグリム童話の『ヘンゼルとグレーテル』と比べてみればわかる。経済的困窮から親に捨てられた兄と妹が、森を彷徨ううちにお菓子の家にたどり着き、そこで魔法使いに捕らえられ、兄は投獄され、妹は下女となってこき使われる。重労働に堪えた妹はやがて魔女をかまどに投げ入れて殺し、兄を救い出して、めでたく帰郷する。面白いのは、初めは泣き虫だったグレーテルが、お菓子の家で大変身を遂げ、にわかに主役に躍り出る一方、しっかり者だったはずのヘンゼルが最後まで子どものまなことである。前半と後半で逆転する兄妹の役割は、この童話のメッセージが「少女の成長と自立」であることを示している。深層心理学的にみれば、ここには思春期の少女の親に対する不信感、魔女に象徴される太母の力からの自立の欲求が描かれているとされる。「Chihiro」にもこうしたメッセージは聞き取れるのではないだろうか。この映画を見た多くの女性が、「千尋の母親の態度が不自然だ」と感じるという話を聞いた。

また興味深いのは、グリム童話が、少女が成長の過程で会う試練に「摂食」と「労働」をあげることである。「明日のパンがない」という理由で捨てられる兄妹は、異界の食物で命をつなぎ、妹は飢えに、兄は過食に苦しむ。「Chihiro」でも飽食への嫌悪、異界の摂食儀礼、過食・拒食といった成長期の女性が直面する食物摂取をめぐる問題が随所に登場する。Ohngesicht と呼ばれる怪物の正体もこのあたりにあるのではないだろうか。

ドイツ人がさしたる抵抗もなく「Chihiro」を受け入れるのは、おそらく彼らの深層にある回路がこれにつながるからであろう。しかし「Chihiro」は古い民話のリメイク版ではない。お

(こうだ よしき、ドイツ文学、Tübingen 1991-93、大東文化大学)